農 業 技 術 情 報

令和７年８月15日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター
十勝東部支所　015-572-3128
ＪＡ十勝池田町　572-3131
高島支所　573-2111
池田町産業振興課　572-3118

農作物の生育・作業の遅速（8月15日現在）　　（ ）内は平年値

作　物　名	遅速日数	生　育　状　況		農作業状況
ばれいしょ	-3	茎長　74.4 (88.7)cm 茎数　4.7 (3.5)本	茎　葉 黄変期 8/11 (8/ 8)	
大豆	+12	茎長　93.7 (72.8)cm 葉数　10.4 (9.6)枚	着莢数 608.6 (464.7) (個/㎡)	
小豆	+7	茎長　69.4 (56.2) 葉数　11.1 (10.6)	着莢数 362.6 (203.1) (個/㎡)	
菜豆（金時）	+7	茎長　62.8 (46.2) 葉数　4.3 (4.0)	着莢数 160.8 (137.1) (個/㎡)	
菜豆（手亡）	+5	茎長　59.2 (47.2) 葉数　7.2 (7.2)	着莢数　260.9 (194.5) (個/㎡)	
てん菜（直播）	-7	草丈 54.6 (58.0)cm　葉数 26.1 (24.6)枚 根周 25.9 (29.7)cm		
牧　草	±0	草丈 74.2 (73.0)cm		収穫始　(8/25)
サイレージ用とうもろこし	+5	草丈 347.7 (317.6)cm 出葉数 18.2 (17.5)枚	絹糸抽出 7/23 (7/29) 乳熟期　8/15　(8/20)	
たまねぎ	－	球径 8.0cm　倒伏期 7/28　根切期 8/14		

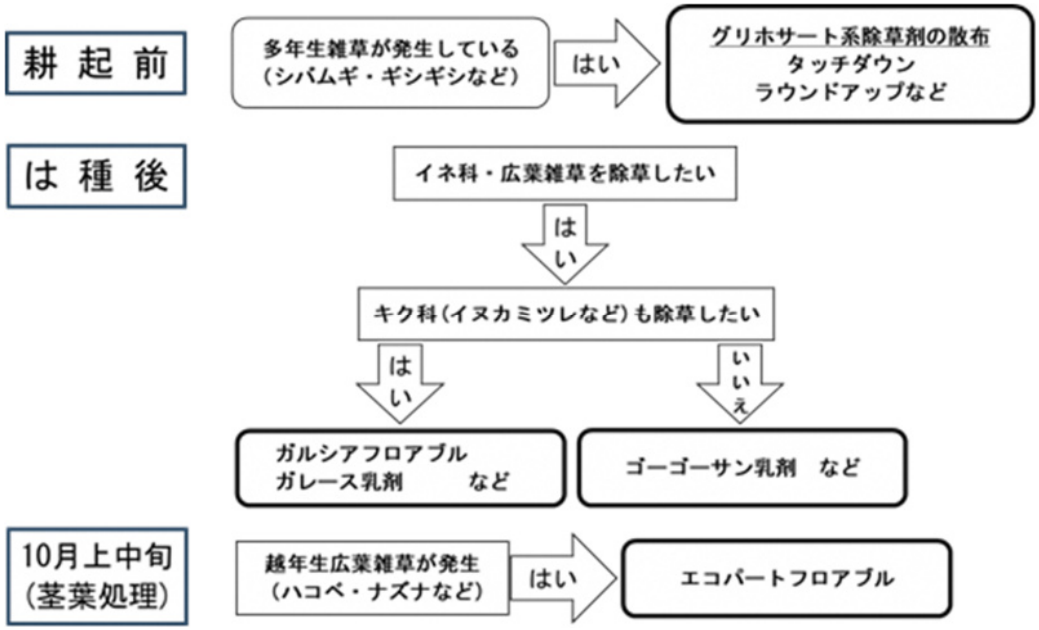
＜秋まき小麦＞

(1) 雑草対策

秋まき小麦のは種前後の除草は、優占雑草種に応じた除草剤を選択してください。

雑草が小麦に与える害としては「養水分の収奪」「病害虫繁殖の助長」などがあり、結果的に収量、品質の低下に繋がります。除草剤を適正に使用し、雑草対策を行ってください。

＜雑草の種類に応じた除草体系例＞



★秋まき小麦ほ場のイネ科雑草は越冬後に対処できません。必ず秋処理を行って下さい。

表１　耕起前の除草剤例

農薬名	コード RAC	処理方法・使用時期	薬量（ml/10a）	回数
タッチダウンｉＱ	9	一年生イネ科雑草 耕起または播種前 （雑草生育期）	250～500	１回
		多年生イネ科雑草 耕起３日前以前 （雑草生育期）	500～1,000	
ラウンドアップ マックスロード	9	耕起前・雑草生育期 水量25～100ℓ	200～500	３回
クサトリキング	9	多年生イネ科雑草 耕起または播種前まで （雑草生育期草丈30cm以下）	250～1,000	３回
		多年生雑草 耕起７日前まで （雑草生育期草丈30cm以下）	500～1,000	

・多年生雑草が 15cm 以上再生後に散布
・展着剤を加用しない
・散布後６時間は降雨がない日に散布（ラウンドアップマックスロードは１時間、タッチダウン iQ は３時間）
・周辺作物に飛散しないよう注意するとともにドリフト低減ノズルの使用が望ましい。少量散布は専用ノズルを使用

（2） 秋まき小麦のは種とは種前準備

高収量・高品質の小麦づくりは適期適正は種からスタートします！

根張りが良く強い株を均一に作るために、過湿状態時のは種床準備は避けましょう。

また、道内各地で様々な種子伝染性病害や土壌病害の発生が拡大しています。リスクを最小限にするために土の移動に注意し、自家種子の使用は避けましょう。

ア　排水、土壌改良、銅欠乏対策

・透排水性の劣るほ場では、心土破砕などにより耕盤層を破砕しましょう。

・は種前に必ず土壌酸度を測定し、pH5.5 以下の場合は 5.8 を目標に酸度矯正をしましょう。

・銅欠乏症状の出やすい土壌（腐植の多い火山性土等）は銅の補給が必要です（Cu 入り肥料等や堆肥の施用）。ただし、銅は微量要素で過剰障害も生じやすいので、土壌診断の基準値に基づき、適正量の肥料を施用しましょう。

イ　は種時期とは種量

①は種時期

越冬前の葉数は５葉を目標に、４～６葉を確保できる時期が「は種時期」です。

早期は種は過繁茂につながり、10 月以降のは種は越冬前に適正な生育量が確保できないため、適期は種を心がけてください。

近年、暖かい秋が続いていた影響で、は種適期は前年より２日遅くなりました。

②は種量

は種時期の早晩により、は種量を増減します。

は種が遅くなるほど、１日当たりのは種量の増加量が大きくなりますので注意が必要です。（表３）

表２　は種時期別のは種量例（池田アメダスから・千粒重 40g で算出）

は種時期	早期	**適期**	晩期
	9/20～23	9/24～28	9/29～10/1
は種粒数(粒/㎡)	110～140	140～180	180～255
は種量(kg/10a)	4.4～5.6	5.6～7.2	7.2～10.2

※産地によって千粒重が違いますので、産地を確認の上、計算例に当てはめては種量を決めて下さい

＜は種量計算例＞

千粒重41.5g、㎡当たりのは種粒数を160粒/㎡にする場合

【 千粒重 g 】× 【 は種粒数 粒/㎡ 】÷1000 =【は種量(kg/10a)】

41.5 g × 160 粒/㎡ ÷1000 =

0.0415 kg × 160,000 粒/10a ÷1000 ≒ 6.64 (kg/10a)

表３　は種日別のは種量例(千粒重 40g で算出)

		9月											10月
		20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	1日
越冬前茎数900本/㎡の場合	は種量 kg/10a	4.4	4.7	5.0	5.3	**5.6**	**6.0**	**6.4**	**6.8**	**7.2**	8.0	9.0	10.2
は種時期	葉数(枚)	6.0			5.5			5.0					4.0
		早期				**適期は種期**					晩期		

※縞萎縮病の発生が予想されるほ場は極端な早まきは避け、遅めに(9/28 頃)は種してください。

③は種深度

は種が深すぎると二段根になり、出芽ムラも重なって初期生育は劣ります。均一な出芽と良好な初期生育を確保するために、以下のことを守ってください。

①砕土を細かくしすぎない

②は種深度は２～３㎝とする（ドリルの場合、**は種前の鎮圧が有効**）

浅まきの場合、出芽は早くなりますが根張りが悪くなり、その後の生育に影響してきます。また、深まきした場合は出芽が遅れ、越冬前の生育量不足による雪腐病発症の危険が高まるため、適正なは種深度を守りましょう。

④施肥量

超冬前に小麦が吸収する窒素は４kg/10a 程度です。リン酸、カリ、苦土は全量基肥として施用しましょう。

過剰な基肥施用はコストが無駄になるほか、越冬後の茎数コントロールが困難になります。また、土壌凍結が浅い年では下層に流亡して地下水・河川汚染の原因となりますので、適正な施肥を行いましょう。

十勝管内では未発生ですが、なまぐさ黒穂病の耕種的防除も併せて行いましょう。

・必ず種子消毒済みの採種ほ産種子を使用し、適期は種を目指しましょう。

・は種床は膨軟にしすぎず、適正は種深度(2～3cm)を守りましょう。
深まきは出芽までの日数が増加するため、感染のリスクが高まります。

＜てんさい＞

（1） 褐斑病の防除

褐斑病の発生が広がっています。ほ場の発病状況を確認し、防除を実施しましょう。

また、高温多雨条件で急速に広まるため、下位葉を中心に観察し、予防的な防除を心がけましょう。

表４　褐斑病防除例

防除時期	農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）
8月20日頃	どさんこスター水和剤	3 M3	500	21日	４回
9月1日頃	マンゼブ剤	M3	400～500	21日	５回

※マンゼブを含む剤の総使用回数は５回まで。

（2） ヨトウガ･シロオビノメイガの防除

老齢化すると薬剤の効果が下がるため、ほ場を観察し、防除適期を逃さないようにしましょう。シロオビノメイガの発生量の多い場合はディアナ SC を使用してください。

表５　ヨトウガの防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用倍率（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
プレバソンフロアブル５	28	4,000～5,000	前日	２回
マッチ乳剤	15	3,000	14日	２回
カスケード乳剤	15	4,000	７日	４回
ディアナSC	5	5,000～7,500	前日	２回

（3） 葉腐病の防除

葉腐病は高温多湿条件で多発します。発生が見られたら直ちに防除を行ってください。

表６　葉腐病の防除薬剤例

薬　剤　名	RACコード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
モンカットフロアブル40	7	1,000	14日前	４回
モンセレン顆粒水和剤	20	1,000	30日前	４回※
リンバー顆粒水和剤	7	4,000	７日前	３回

※モンセレン顆粒水和剤の使用回数は育苗中を含む

ほのぼの情報や農作物防除基準を参考に適正防除に努めてください。

＜ばれいしょ＞

（1） 茎葉処理

〇薬剤処理による方法

茎葉枯凋剤の散布は塊茎が目標の大きさに達した時期で晴天無風の日を選んで散布してください。

表７　茎葉枯凋処理剤

農薬名	使用量 (ml/10a)	水量 (ﾘｯﾄﾙ/10a)	使用時期	使用回数 （以内）
デシカン乳剤	250～450	100	茎葉黄変始～収穫３日前まで	２回

※接触剤のため茎葉にまんべんなく薬剤を付着させる。
※茎葉黄変期前に使用した場合、枯凋が不完全になる場合がある。
※処理後２～３時間以内に、降雨が予想される場合には使用を避ける。
※生理的ストレスにより維管束褐変を生じやすいので、土壌が極端に乾燥しているときは使用を避ける。
※散布の際にはドリフトを起こさないように注意する。

○リーフチョッパーによる処理

リーフチョッパーを使用する場合は以下のことに注意してください。

・茎葉処理作業は茎葉黄変期後の好天時に作業する。
・塊茎の損傷や緑化防止のため、刈取り高さは培土を崩さないよう地表から余裕をもたせて処理する。
・後部に石れきが飛散しやすく危険なので、周囲に人がいないことを確認後処理する。

（２） 収穫時の注意

・収穫作業は茎葉枯凋処理から７～10 日後に、いもの皮むけが生じないことを確認し、晴れた暖かい日に行いましょう。また、茎葉枯凋後７～14 日以内に収穫しましょう。
・収穫が早すぎると、収量、でん粉価の減少、皮むけなどの障害が発生する可能性があります。
・収穫が遅れると、黒あざ病菌核の増加や、腐敗、緑化等品質の低下が懸念されます。
・掘り取り後は腐敗を防ぐため、風乾を十分に行ってください。
・選別時や網コン等への投入時には、傷、打撲などができないように注意しましょう。

＜高温時の堀取りは品温が上がり日焼けや貯蔵後の腐敗に繋がるので注意してください＞

（３） 疫病による塊茎腐敗対策

生育後半の疫病発生は塊茎腐敗の原因となります。収穫までの日数や病害の発生状況に応じて薬剤を選定し、防除を継続しましょう。

※薬剤については前号の情報等を参照してください。

（4） 軟腐病の防除

本年は高温による軟腐病の発生が懸念されます。高温多湿条件、または倒伏したほ場で多発しやすいため、収穫までの日数や病害の発生状況に応じて薬剤散布を継続してください。

表８　軟腐病の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用倍率	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	効果の発現
スターナ水和剤	31※1	1,000倍	７日	５回	予防・治療
バクテサイド水和剤	41、25※2、M1	750～1,000倍	７日	５回	予防・治療
コサイド3000	M1	1,000倍	―	―	予防

※１ オキソリニック酸（RACコード31）に対する低感受性菌が出現している地域があるので、連用は避ける。
また、オキソリニック酸（RACコード31）を含む剤の使用は合計５回までとする。

※２ ストレプトマイシン（RACコード25）を含む剤の使用は合計５回までとする。

※３　銅剤、アグリマイシン、乳剤などは混用しない

＜ 豆 類 ＞

豆類は全般的に生育が進んでいますので、ほ場を観察して防除時期の検討をお願います。

（1） マキバカスミカメの防除

近年、小豆のマキバカスミカメによる子実の被害が発生しています。子実の表面に針で刺したような被害が発生します。８月中旬に発生する第２世代の成虫が小豆の莢を吸汁加害し品質を低下させるので、この時期に防除しましょう。

また、アズキノメイガも防除時期であることから、アズキノメイガ・カメムシ両方に効果のある薬剤使用を検討しましょう。

表９　小豆　マキバカスミカメの防除例

薬剤名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	４回
ゲットアウトＷＤＧ	3A	3,000	７日	３回

※ゲットアウトWDGはカメムシ類に登録があります

（2） アズキノメイガ・マメノメイガの防除

町内で発生が確認されています。ほ場を観察し、防除を実施しましょう。

表 10　アズキノメイガの防除例

農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	４回
プレバソンフロアブル５	28	4,000	７日	２回
ゲットアウトＷＤＧ	3A	3,000	７日	３回
ディアナSC	5	2,500～5,000	前日	２回

（3） マメアブラムシの防除（小豆）

７月中旬以降に高温少雨の日が続くと急激に発生することがあります。発生が見られた場合は防除を実施します。発生は局所集中的なので、ほ場の一部で発見したらその部分だけでも直ちに薬剤散布し拡大を抑えることが重要です。

表 11　小豆　マメアブラムシの防除例

農薬名	ＲＡＣ コード	使用倍率（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
モスピランＳＬ液剤	4A	2,000～4,000	14日	３回
ゲットアウトＷＤＧ	3A	3,000	７日	３回
ウララＤＦ	29	4,000	７日	２回

（4） 大豆・小豆・手亡 ハダニの防除

町内で発生が確認されています。ハダニが寄生すると葉に白い斑点が発生し、多発すると褐変して生育不良を起こします。ほ場でハダニや葉の褐変等を確認した場合は速やかに防除を行いましょう。

表 12　ハダニの防除例

対象豆類	農薬名	RAC コード	使用倍率（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
大豆	トクチオン乳剤	1B	1,000	30日	３回
	コロマイト乳剤	6	1,500	７日	２回
小豆	コロマイト乳剤	6	2,000	14日	２回
	ダニトロンフロアブル	21A	1,000～2,000	７日	1回
手亡	コロマイト乳剤	6	1,500	７日	２回
	ダニトロンフロアブル	21A	1,000	７日	1回

※使用時期（収穫前日数）には十分に注意し、散布してください

（5） インゲンマメゾウムシの防除

インゲンマメゾウムシの成虫は、７月下旬以降に出現し８月上旬～９月上旬に発生が見られ、成熟の早い菜豆が被害を受けやすくなります。防除時期は下記を目安にして下さい。

金時　莢の色が抜け、白莢が見える時期（８月中旬～）
手亡　子実が大きくなり莢の色が抜け、白莢が見える時期（８月下旬以降）

表 13　インゲンマメゾウムシの防除例

防除回数	農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
１回目	バイスロイド乳剤	3A	2,000	７日	３回
２回目	ダントツ水溶剤	4A	2,000	前日	３回

※１週間ごとに２回防除する
※莢全体に薬剤がかかるよう、散布水量は多めとする

＜収穫から保管時の注意事項＞
- 成熟期以降は早めに収穫する。
- 収穫した豆は速やかに出荷し、必要以上の長期間の保管は避ける。
- は種時に余った種子は、適正に処分する。豆の一時保管場所を清掃し、餌となる豆を一年間残さない。

（6） 菜豆類の収穫作業

○菜豆類の収穫

本年の生育は平年より進んでいます。収穫準備も早めに行いましょう。ほ場毎の登熟状況と天候を見ながら、収穫方法に応じて適期収穫と乾燥調製に努めましょう。

収穫が早すぎると、へこみ・つぶれ粒が発生しやすくなり、収穫が遅れると色流れ粒、裂皮、割れ粒が発生しやすくなります。収穫時には収穫機械、脱穀機の調整を確認するようにしましょう。

○ピックアップ収穫
- 収穫・脱穀適期：完熟期（熟莢率ほぼ 100%）から６日以内
- 作業速度：0.7m/s 以下
- 倒伏程度によらず収穫が可能（ビーンハーベスタまたはビーンカッタ）

○ダイレクト収穫
- 収穫・脱穀適期：完熟期（熟莢率ほぼ 100%）から６日以内
- 作業速度：0.6～0.8m/s（総重量 700g/m^2 以上では 0.6m/s 未満）
- 倒伏が見られるほ場では、作業機の速度は 0.5m/s で収穫してください。倒伏がひどいほ場では追い刈り収穫を行ってください。

○白系菜豆（手亡・福白金時）の汚粒・損傷について

手亡類は完熟期で子実水分が 25%程度まで低下しますが、金時類と比べそれ以降の水分の減りが遅いため注意が必要です。汚粒や損傷を避けるために、以下のことに注意しましょう。

・完熟期にすぐ収穫できない場合、品質が著しく落ちるので注意してください。
・降雨直後や高水分での収穫は避ける。（手亡類は子実水分 20%以下（完熟期から 1 週間以降）で収穫可能）
・収穫前に雑草の抜き取りを行う。
・過乾燥・葉落ちの悪い豆は、スレッシャの脱穀スピードを抑える。

野 菜

＜たまねぎ＞

根切り後、降雨があった場合は、２次発根、生長を防ぐため再度根切りをしましょう。

(１)根切り作業

根切りの目的は、変形、裂皮、皮ムケ防止や均一な枯葉、着色促進による品質の向上です。適期に根切りを行い、品質低下を防ぎましょう。

○根切り時期の目安

中生～晩生品種	倒伏揃後１０～１４日

○「倒伏期」…茎葉が 80～90%倒伏した時期。

○可能な限り土壌が乾燥した晴天日に行う。
○高温で日差しの強い日は、日焼けが生じる恐れがあるため作業を見合わせる。
○枕地を手掘りして寄せる場合は、茎葉で球を覆い長期間放置しない。

(２)根切り～収穫までの防除

灰色腐敗病や細菌性病害の被害を防ぐため、適期に防除を実施し、被害軽減に努めましょう。

表１　根切り～収穫までのたまねぎの防除例

使用時期		薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	成分回数
根切り直後		スミレックス水和剤	1,000	収穫前日	５回以内	１回
収穫直前	通常	トップジンM水和剤	500～1,000	収穫前日	５回以内	１回
	多雨	ベルクート水和剤	1,000	収穫前日	５回以内	１回

（3）収穫の適期実施

長雨等により収穫が遅れると、泥の付着や黒シミの発生等により、外観品質が低下します。

計画的な根切りとともに、根切り後は茎葉が枯葉したら早めに収穫を行ってください。
- ・肌腐れ等の障害球が混入しないよう収穫前に除去してください。
- ・タッピングは首部が十分乾燥してから行ってください。
- ・収穫後のコンテナは、搬出しやすい排水良好な場所で風乾してください。

（4）来年の苗床作り

苗床に緑肥えん麦をは種した場合は、出穂始までにすき込んでください。
十分に分解させるためには２～３回の土壌混和が必要です。
土壌混和後は必ず土壌診断を実施し、分析値に基づいた適正施肥に努めてください。

（5）本畑の緑肥栽培

早生品種のほ場では、収穫後に緑肥を栽培して地力維持と病害低減を図りましょう。

後作緑肥にえん麦を栽培する場合、可能な限り早めには種してください。は種が９月になる場合は、は種量を 15～20kg/10a と通常よりやや多めにしてください。

＜ながいも＞

８月15日現在の東部管内作況調査では、いも重が平年を上回り、生育は良好です。

（1）強風によるつる切れ防止対策

９月にかけて茎葉量が最も多い時期となります。強風等による「つる切れ」防止のため、支柱の補強やネットのたるみの点検・補強を行ってください。

（2）トレンチャー溝の陥没

ほ場の陥没は滞水や奇形いも発生の原因となります。地上部の陥没が見られなくても、水の流れ等で地下に空洞が発生する場合もあります。

特に入り口付近に陥没が見られた際は早期に通路の土で埋め戻すようにしてください。

＜にんにく＞

（1）植え付け前の種子消毒

チューリップサビダニ、イモグサレセンチュウ、黒腐菌核病対策として必要に応じた種子消毒を実施してください。

表2　植え付け前の種子消毒薬剤例

時期	薬剤名	対象病害	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
種子消毒	ガードホープ液剤	チューリップサビダニ	500	植付前	１回以内（種子消毒）
	ベンレートT水和剤２０（種球湿粉衣）	黒腐菌核病	種球重量の0.5～1%	植付前	１回以内
		イモグサレセンチュウ	種球重量の1%		

〇種子消毒例

ガードホープ液剤（500 倍）30 分種球浸漬
↓陰干風乾
ベンレート T 水和剤 20（種子重量の 1%）種球粉衣
↓日陰干し（1～2 日）
植え付け

～農薬の安全使用と農作業事故防止に努めましょう～

例年、夏から秋の収穫時期に事故が多くなります。

特にハーベスタによる「挟まれ・巻き込まれ」の事故に十分注意しましょう。

☆だぶつきのない格好で作業しましょう。

☆緊急回転停止装置を複数装備しましょう。

☆選別部に物が詰まった場合は、必ず回転を止めてから除去してください。